治癒を妨げる“治療法”

脳障害の治療で世界的に有名なアメリカのグレン・ドーマン博士の著書に、“親こそ最良の医師”という本があります。脳障害は従来、一生治癒することの出来ない難病だと思われて来ましたが、博士はその治療法を発見し、長期にわたる反復訓練さえ実施すれば治癒することを教えてくれました。

ただ、そのためには大変な根気がなければならず、その点で最もその治療に適した人は親であると考え、“親こそ最良の医師”という本を書いたのです。

親はもちろん脳障害の治療法を知っていません。しかし、もし正しい治療法を教えてやってこれをよく理解させ、体得させてやるならば、親ほどその施療を熱心に根気よく継続して実施できる者はいないはずである、そう考えた博士は、その治療を親に任せる方法を考え出したのです。

その思い付きの動機に、まことに興味深いものがあります。博士はほぼ40年に及ぶ施療の経験を重ねて来ていますが、最初の10年間は失敗の連続、失望の連続であったと、その著書で自ら述べています。

博士は、当時最も有効だと一般に認められているあらゆる治療法を患者に実施したのですが、一向に良くなっていきません。ところが、そういう治療法を受けたくても受けられない貧しい家庭の脳障害児に、意外にも良くなっている例が、少なからずあることに博士は気が付きました。

施療を受けない患者の方が、施療を受けている患者より良くなるとは一体どうしたことか。それは施療を受けない患者が、何か有効な別の治療法を実践しているとしか考えられないではないか。「何か必ずある」そう確信して博士はそれを追求し、ついにその正しい治療法を発見したのです。

その治療法とは“這う”ことだったのです。貧しい家庭の脳障害児は、家の中にほっておかれます。それで子供は何かを求めて家の中を這い回って一日を過ごします。その“這う”ことが、脳障害の治療になっていることを突きとめたのです。

脳障害のため足の萎えた幼児に出来ることは“這う”ことだけです。足の萎えた筋肉を強くするには、その筋肉を使うことが必要でそれ以外には何もありません。“這う”ことは脳障害児に最もやさしく出来て、最も有効な足の訓練であり、治療法だったのです。

前にお話した“助長”という言葉が、ここにもぴったりと当てはまるではありませんか。これまで脳障害児のために考えられ、施されて来た治療法は、いわば“助長”に過ぎなかったのです。それよりは、脳障害児自らの力によって、自分の足を自分の使いたいままに使わせていることの方が、ずっと有効な治療法になるのです。

このことを家庭教育にも推し及ぼして考えてみれば、きっと有効な教育法がつかめると思います。